

## 韓国都市部における民間信仰ネットワークと貸し儀礼場

松崎 遼子(大阪大学人間科学研究科/啓明大学校日本学科)

本発表は、今日の韓国において降神巫による儀礼を成立させている基盤が、親族関係、地域共同体、巫者同士の強固な師弟関係などから、より緩やかな人々の繋がりによるものに比重を移していることを示し、同時に、複数の指向性を持った共同性が発揮される場としてクッタン(*kut-tang*)と呼ばれる貸し儀礼場が重要な役割を果たしていることを報告するものである。

はじめに、ある女性クライアントに注目し、彼女が問題解決のために頼る宗教的リソースが様々な個人的な出会いをきっかけに生成されてきたことを述べる。彼女の場合、自宅の近所にいる巫者とはつきあいがなく、出身地の縁、病院での偶然の出会いによる縁、友人の親戚関係、寺の法会に参加した人の噂などさまざまな個人的な出会いから、複数の宗教的職能者(巫者とは限らない)に相談や儀礼の依頼をするようになった。彼女は、特定のグループに参加するのではなく、宗教的職能者の得意とする分野を吟味し、相談先を使い分けている。

次に、儀礼執行者たちの関係についての特徴を2点報告する。まず、降神儀礼を執行するグループのメンバーは、神縁によって結ばれた師弟関係が核になる(柳東植 1976:147)ことが基本ではあるが、流動性もかなり高い。神降ろしをしてやった弟子を「一年間で解放する」という巫者や、師匠がいない巫者、儀礼に必要な楽器の奏法を(師からではなく)一般人向けの教室に通って習得する巫者などが存在する。クッタンで偶然出会った巫者同士が、たまたま意気投合して協力関係を結ぶような例もある。

また、近年その数が増加し、活動が多様化・活発化しているのが全国的なネットワークを持つ巫者の団体である。特に、彼ら自身が主催して行う儀礼は注目に値する。この種の儀礼では、朝鮮半島全域で行われる巫俗儀礼のうち特徴的な部分を持ち寄った「八道クツ(*paldo-kut*)」、不特定多数の魂への慰霊、領土問題に関するシュプレヒコールなど、国家を想起させるような仕掛けが多数なされる。それと同時に、希望者一人ひとりへの神のお告げなど、個人の救済へ道も示される。このような儀礼は、大々的な場合は一般市民の目に留まるようなスペースで行われるが、小規模な場合はクッタンで行われることもある。

以上のように、現代の韓国都市部における降神儀礼は、明確な境界線を持って人を取り込んだり排除したりするような共同体ではなく、個人が選択的に参与することが可能なゆるやかなネットワークに依拠するようになってきている。このような個人、家や親族、儀礼を後援する中間団体、国家など、さまざまな指向性を持って集まるクライアントや巫者たちの出会いを可能にし、ネットワークをつなぐ役割の一端を担っているのがクッタンという場である。巫俗儀礼の行われる場所は、1970年代から徐々に、家庭や村落の中ではなく村落から外れたところに位置するクッタンへ移行していった(具重會 2000 :195)。これにより、従来儀礼に参加していた地域共同体の人々や、依頼者と関係が比較的遠い親族が儀礼に参加する機会は減少した。その一方、クッタンには地域も系譜も異なる巫者やその信徒たちが集まり、情報交換の場となった。これが、今日的な儀礼の姿を生み出す原動力にもなっているのである。

### 参照文献

- 具 重會 2000 「鷄龍山クッタンについて」『シャーマニズム研究』2: 197-207(韓国語)。  
柳東植 1976 『朝鮮のシャーマニズム』学生社。